



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No.10 1998.12.

目次	見出し / 執筆者	掲載頁
土木史ニュース	倉敷市上東遺跡で発掘された弥生時代の港湾施設	1
フォーラム	皇居外苑祝田口付近の石垣修復工事について 下澤 公明	2
地域のニュース	伊能忠敬、五島測量の足跡 新谷 洋二	3
	建築家ヴォーリズが使用した変形レンガ 後藤恵之輔	3
海外土木史	アメリカのコンサルタントにおける土木遺産に関する活動 笠 文彦／荒木克己	4
関連学会ニュース	「建築の20世紀展 終わりから始まりへ」開催される フレデリック・バーガー	5
学会の動き	「第二次世界大戦後の復興都市計画の国際比較」	5
	平成10年度土木史研究委員会報告	6
	土木博物館（仮称）基本計画策定委員会報告	6
	平成10年度土木史研究委員会の構成	6
	「地域資産としての近代土木遺産」シンポジウムの報告	7
	「第19回土木史研究発表会」の開催と自由投稿論文の募集	7
土木史関係図書	『建物の見方・しらべ方』／『日本百名橋』	8

倉敷市上東遺跡で発掘された弥生時代の港湾施設

岡山県古代吉備文化財センターは、平成9年度に県道箕島高松線改良工事に伴い調査した上東遺跡で、標記の遺構を調査した。現況は水田で、標高は117cmを測る。調査範囲は、東西の幅25mである。

遺構は、表土下70cm程で北東から南西の方向に粘質土が帯状に存在し、北西側は直線的に下がるが南東側の北寄りが弧を描く形状を呈するようになる。この時に確認した規模は、長さ45m、幅5～14m、高さ2m余りであった。

土手は、北東側の東に幅を広げる部分と南西側の細くなる部分とで、構築内容が明らかに異なっていた。仮に、前者をⅠ工区、後者をⅡ工区として説明をする。Ⅰ工区は、基盤層となる暗灰色粘土層を幅210cm、高さ20cm程に台形状に削りだし基礎部分を造成する。次に、杭を基盤層に打ち込むが、杭の形状は途中で屈曲して変形しているものが多く、長さも150cmを超えるものもある。このようなことから、杭には適さない内容のものである。しかしながら、この暗灰色粘土層に保持するだけ打ち込み、あとは、土を盛って行くのである。この工法により、さらに外側に杭を打ち造成をすることで連続して広い面の造成が比較的容易に可能となることが思考される。

杭列は、横木を2～3本用いる・杭を密に用い、その外側に樹皮を付す・杭が半截または平板状の用いる・横木を留めるのに杭を「ハ」の字状に打ち込むなどの工法が認められる。

土盛りは、敷粗朶工法を用いるが、粘土の間に幾層にもわたり使用されているのは葉と葦が認め

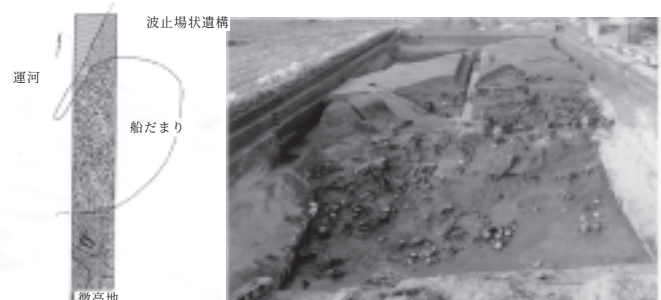
られるが、何れも単体で敷かれる。

Ⅱ工区は、Ⅰ工区が完了した後に幅5m程の波止場状の土盛りを造成しているのである。ここでは、Ⅰ工区で認められた暗灰色粘土層がなく粗砂層に横木をおいて基礎としている。土盛りは、木片を多く含む層・砂質土・薄い粘土層が版築状に認められる。両工区を繋ぐ部分は、長いもので670cm、太いもので径30cmを測る丸太材を4、5本横におき土留めとしている。そして、この最上面に厚さ30cm前後の粘質土は、Ⅰ工区にも平均的に認められることから造成の最後の工程である面の形成に用いられたとするのが妥当であろう。

遺構の時期については、Ⅱ工区の基礎部分で「貨泉」、弥生時代後期前葉の土器が出土していることから、当該期に造成がはじめられ、その後葉期まで使用されていたのである。

現在整理中であり、個々の内容を詰めていかなければならないが、当該期の技術内容を知りうる遺構として注目されるのである。

（岡山県古代吉備文化財センター 下澤公明）



波止場状遺構（南から）

皇居外苑祝田口付近の 石垣修復工事について

新谷 洋二（日本大学教授）



平成9年に皇居外苑の祝田口付近の石垣修復工事が環境庁により行われた。この祝田口の箇所は東京の中でも交通量が多く、石垣が次第に局所的に孕んだり、歪んできて、危険なので、その積み直しが必要になってきた。その際、私は東京都文化財保護審議会委員（史跡担当）をしている関係で、石垣修復の指導を依頼された。

この箇所は旧江戸城の外桜田門から日比谷の櫓台に至る石垣の中間に位置し、元来、慶長19（1614）年に石垣築造されたところであるが、江戸時代においては近いところで、安政大地震で崩れて修築されている。その後、明治39（1906）年に明治37・38戦役を記念して、この箇所の石垣を開削し、堀を埋めて、凱旋道路（現在の祝田橋通り）が造られた際、道路側は間知石で布積みされた。さらに大正12（1923）年の関東大震災で崩れ、直ちに石垣は在来通りの空積みで復旧されている。その後、昭和14～18（1939～43）年に紀元2600年記念宮城外苑整備事業で、馬場先口などの石垣整備が行われているが、この箇所がどの程度整備されたかについては明らかでない。現在この地区は国の特別史跡である。

この石垣修復に当って、どのように修復すべきかが大きな課題となった。文化財としての城石垣は通常石ごとに番号を付して従前通りに積み直されているが、写真1のように、堀に面した旧江戸城石垣の向かって左側の逆三角形の部分は石の大きさも小さく、積み方も全体と異質で粗雑なもの

になっていた。そこでこの石垣のAuthenticityをどう考えるかが問題となった。

この左側の逆三角形部分の石垣は関東大震災直後に道路側の明治石垣とともに、従前通りの空積みで復旧されているが、現場で見ても分かる通り、余りにも粗雑な積み方で、個々の築石も小さく、その控えの長さも短いため、そのまま積み直しても強度的に不安定である。この左側部分の石垣を解体して中央部分の石垣を調べてみると、大きさ・形状・控えの長さのしっかりした築石群とたっぷりした裏込めが出てきた。こういったことから今回修理する左側部分の石垣は関東大震災以降に積み直された箇所だということが文献上からも実地検証上からも明らかになった。

そこで築石の材料を補充して中央から右側部分と同様な積み方にする方がこの部分の石垣の在来の姿に近いものとなり、かつ構造的にもより安定したものになると考えた。石材はたまたま紀元2600年記念宮城外苑整備事業に際して未使用のままに確保されていた神奈川県真鶴海岸産と思われる安山岩を使用した。現在では殆ど入手できない代物である。ただし、在来の石材に較べて白っぽいのが問題だが、時間が経てば落ち着くと思う。なお、祝田橋通りの明治石垣は従前通りに修復された。

このような考え方に基づいて、ある程度創作かもしれないが、従来よりは本来の石垣の姿に近付けることができたのではないかと考えている。



写真1：石垣修復前



写真2：石垣修復後

地 域 の ニ ュ ー ス

伊能忠敬、五島測量の足跡

今年（1998年）は、「大日本沿海輿地全図」を作製した伊能忠敬の没後180年にあたる。忠敬の全国測量を改めて眺めてみれば、長崎県五島にもその足跡が二つ残されている。

一つは忠敬による天測である。忠敬は五島福江に着いた翌日、文化10年7月1日（1813年7月27日）の夜、浜町で天体測量を行い、当地の緯度、経度を求めている。福江市浜町の公園には、これを示す「伊能忠敬天測之地」の記念碑が、福江市教育委員会により建てられている。忠敬の測量結果（北緯 $32^{\circ}41'5''$ 、東経 $128^{\circ}51'$ ）が、現在の値（北緯 $32^{\circ}41'38''$ 、東経 $128^{\circ}50'55''$ ）と比較され、忠敬の測量水準が極めて高かったことがわかる。

他の一つは坂部貞兵衛の客死である。坂部は文化2（1805）年34才の時、西国の測量に向かう忠敬の測量隊に加わった。忠敬の全国測量は、享和3（1803）年以降、本隊と支隊が別個に測量を実施する方法によって、効率的に行われていた。坂部もやがて支隊の隊長となり忠敬を補佐し、時には忠敬を励まし、時には諫めることもあった。

文化10年5月21日、対馬測量を終えた測量隊一行は、翌々日から五島列島の測量に取りかかり、

北から測り始めた。1ヶ月が過ぎた6月20日、伊能隊は奈留島へ、坂部隊は日島へと分かれたが、坂部が発病したのは日島に着いて間もなくである。忠敬の幕府天文方への報告によれば、腸チフスであったと推察される。6月27日、坂部は治療のため福江へ単身直行した。福江島を測量中の忠敬のもとに、坂部危篤の報が届いたのは7月13日のことである。14日、忠敬は枕元へ駆けつけたが、翌15日八時半頃坂部は死去した。

坂部貞兵衛、享年43才。墓は福江市宗念寺に今もある。



（長崎大学 後藤恵之輔） 坂部貞兵衛の墓

ヴォーリズが用いた高温変形煉瓦について

滋賀県南部には、明治時代にいくつかの煉瓦工場が造られ、鉄道施設や琵琶湖疏水などの建設に必要な煉瓦が焼かれてきた。その中心になったのが1883（明治16）年に造られた近江八幡市の湖東組の煉瓦工場であり、その後、中川煉化製造所として、1969（昭和44）年まで煉瓦が焼かれていた¹⁾。

近江八幡市を拠点とした建築家ヴォーリズ（W. M. Vories：1880－1964）は、市内池田町に民家を造っているが、これらの民家の塀に高温変形煉瓦を用いている。ここに使用された煉瓦については、中川煉化工場にヴォーリズが訪れ、撥ねものの変形煉瓦の山を譲り受け、民家の塀に用いたと伝えられている。

大津市膳所地区には、近江八幡市のヴォーリズの民家と同様の高温変形煉瓦を用いた民家の塀が16カ所存在する。その多くは医院あるいはその近辺の住居の塀に用いられているものである。膳所には1909（明治42）年に中川煉化の分工場が造られているため、ここで焼かれた煉瓦の撥ねものが用いられたものと考えられるが、ヴォーリズとの関係は不明である。また、分工場の位置についても、現在の膳所公園（膳所城跡）にあったとも言われているが、明らかではない。ただし、倉庫のあった位置は確認できた。

近江八幡市には、1916（大正5）年に築かれた楕円形のホフマン窯が、現在も草生してはいるが

残っており、これを復活して煉瓦を焼く試みが昨年10月10日に行われ、30年ぶりに火が入れられた。市民グループが町おこしの一環として企画したもので、金沢学院大学水野信太郎先生の指導により、ホフマン窯の一室を利用して煉瓦が焼かれた。また、ホフマン窯の保存活動実行委員会がつくられ、一口1,500円の寄付を募り、本人の名前を彫った煉瓦一個を贈り、もう一個を建物の補修にあてるなどの活動が行われている。

（龍谷大学 竺 文彦

環境しがの風 荒木克己）

1）水野信太郎：湖東組創立とその技術の系譜、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.745、1986



ヴォーリズ住宅の高温変形煉瓦塀（1997.10.10）

アメリカのコンサルタントにおける土木遺産に関する活動

ルイス・バーガー・インターナショナル フレデリック・バーガー

建設コンサルタントであるバーガー社は、通常の建設コンサルタント活動の他に、文化財グループ（CRG）を組織して、土木遺産の歴史的検討（発掘など考古学的アプローチを含む）やそれらの管理・保存計画などの事業を進めています。アメリカの文化財工業規格の制定では、1981年以来、活動の中心的役割を果たしています。これらの分野でのサービスの深さ、および広さは、他に匹敵するものはありません。最近、この文化財グループが扱った2つの国際的プロジェクトの例を紹介します。

一交通計画における景観面からの検討一

交通インフラの維持・復旧・再建や改良は政府や企業にとって変わらぬ重要な課題です。CRGは、規制・調整面でのこれらのニーズを満たすために当局と企業を支援する活動をしています。このために短時間での検討の実施や、多様に変化するプロジェクトのニーズに対応する能力を高めてきました。

過去10年間、アメリカでは、騒音・大気・水・湿原や文化財へのインパクトなど、生活の質に影響を与える多くの要因から、住民の高速道路への不満は高まっています。景観、環境問題は、その重要性から今日的な課題となっております。

しばしば、景観の要件は、利便性、安全性、経済性などと同様な重要性を持っています。バーガー社は急速に表面化している景観の分野における最前線に立っています。

事例としては、第二京阪高速道路と第二東名高速道路（バーガー・長大、JHの共同プロジェクト）があります。このプロジェクトにおけるバーガー社の研究は2つの部分から成ります。一つはJHに対して道路施設の最終設計に取り入れられるような景観ガイドラインの策定であり、もう一

つは調査結果をビデオ化することです。

一保存計画のための包括的解決一

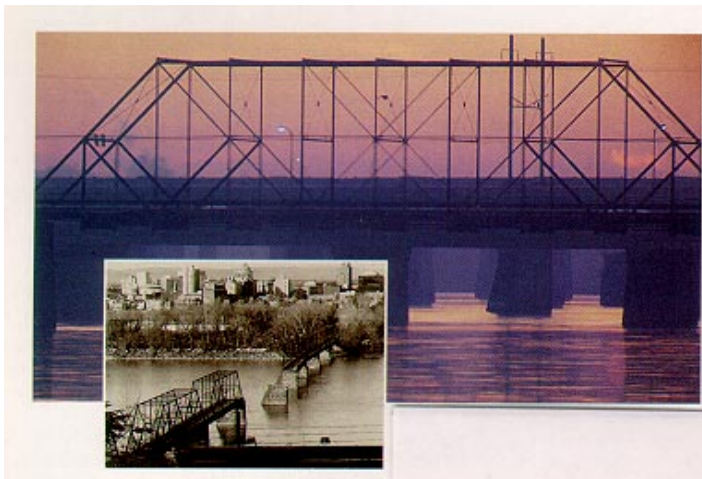
バーガー社は、多くの顧客に対して、目録・評価・記録・資料および保存計画を含む広い範囲の文化財サービスを提供しています。その事業は、歴史的意味の定義、歴史的調査および解釈、歴史的建造物の構造特性にあった記録、考古学的調査、評価、および記録文書の修繕などを含んでいます。常に、すべての水準における行政法人への政策や手続き、管理への支援を提供しており、バーガー社の能力は総合的文化財管理計画を準備するところまできております。

保存計画の一つの例として北タイのチェンマイのプロジェクトがあります。チェンマイは急激に成長した都市で、魅力ある地域独自の文化遺産により、年間100～200万人の来訪者が訪れる観光の中心地として栄えています。この都市は、大量の観光客人口や急激な成長、生活水準の向上に対処しながら、独特の建築物や文化財の保護に取り組んでいます。州の職員はバーガー社に歴史的建造物の保存と環境のコントロール、公的投資政策と職員の訓練等を具体化するアクションプランの策定を委託しました。チェンマイ大学と協力のもと、歴史的遺産を保存すると同時に、観光事業は現行のままで行えるような計画を展開しました。

文化財サービス活動に関する、さらに詳しい内容については、インターネットホームページを参照下さい（<http://www.iba-crg.com>）。

（この原稿は土木遺産に関する当土木史フォーラム小委員会からの取材問い合わせに対する回答として、コンサルタントの

LOUIS BERGER INTERNATIONAL, INC.より寄稿いただいたものです（1998.6.15受付）。



Walnut Street Bridge
(photo : Walter Choroszewski, 1997)

バーガー社のCRGが災害により壊れたウォールナットストリート橋（1890年完成）の復旧に携わった例

「建築の20世紀展 終わってから始まりへ」開催される

20世紀も残すところ2年ばかりとなり、様々な分野について様々なメディアで今世紀を回顧する試みが行われている。

今夏、東京都現代美術館で開催された『建築の20世紀展 終わってから始まりへ』は、20世紀の技術革新・社会変革によって大きな変貌を遂げた建築・都市分野の今世紀を、世界規模で様々な視点より捉え紹介した展覧会である。

東京都現代美術館の企画展会場の4フロアをすべて使って大規模に展開された本展示は、20世紀の建築や都市の歴史を普通の歴史叙述のように地域ごとに時代順に見せるのではない。展示場は「1. 世紀の変わり目の大計画：世界の秩序を描く、2. 20世紀初頭における植民地主義、……、20. 実験室としての住宅、21. スカイスクレーパー：20世紀のビルディングタイプ」と題した21の「セクション」（視点）に分けられ、図面はもとより、模型・記録映像・コンピューターグラフィックスを駆使して、20世紀の建築や都市がどのように認識されていたのかを示している。

展示ではル・コルビュジェやフランク・ロイド・ライトといった、おなじみの建築家の図面やドローイングはもとより、日本では見ることのできないナチス時代のドイツやスターリン時代のソ

連の独裁者による建築や都市計画を、精緻な図面や透視図によって見るができる。なかでも圧巻は「The Unbuilt（未構築）」と題された、実現されなかった建築計画のコンピューターグラフィックスによる映像である。大画面に映し出された臨場感あふれる映像によって、未完の建物の空間や質感、さらには室内に差し込む光線の時間的変化までも仮想現実的に体験することができる。

また、近代建築思潮の宣言文を記した壁で迷路を構成した「宣言の迷宮」や、大テーブルの上に展示に関する参考文献を一同に並べ自由に閲覧させたり、世界各国の高層ビルを白木の模型で同縮尺に縮小して並べ、その高さの違いを体感させるなど、展示手法にも面白い取り組みがなされている。

総花的で收拾がつかなくなってしまう感はあったものの、近代建築史に対する多様な視点・歴史の切り口を知らしめた有意義な展示となった。

なお本展覧会は国際巡回展として、メキシコシティ・ケルン・サンパウロ・ロサンゼルス・ニューヨークを巡回している。

（国立科学博物館 久保田稔男）

「第二次世界大戦後の復興都市計画の国際比較」（日本都市計画学会）

日本都市計画学会学術研究論文発表会（11月7-8日於・東北芸術工科大学）でのワークショップから、「第二次世界大戦の復興都市計画の国際比較」について報告する。

当日は、石田頼房（工学院大学教授）及びCarola HEIN（工学院大学客員研究員）をConvenerとして、ドイツから来日したHartmut FRANK（ハンブルグ芸術大学教授）、石丸紀興（広島大学教授）、西山康雄（東京電機大学教授）、越澤明（北海道大学教授）、長谷川純一（大阪市立大学助教授）の5人が発表を行った。ここでは、発表はすべて英語（通訳無し）、質疑は日本語及び英語で行うという形式がとられた。

ワークショップの背景として、ヨーロッパの復興計画史については、その国ごとに研究されてきてはいるものの、まとまった出版が僅かにすぎないこと、また日本の復興計画は、アメリカの占領政策のもとで行われたという特殊性から、欧米での研究の視野には入っていなかったという経緯がある。そこで、日本と欧米の研究者が、今後国際比較研究を進めていく上での端緒になればというのが、今回の目的の一つと見られる。

FRANKはドイツを中心に、ヨーロッパ主要国における復興計画の経緯と内容を論述、HEINは、第二次大戦の東京とベルリンの戦災復興事業の対比に重点を置いて説を展開した。石丸は、日本の戦災の

特質はヨーロッパに対して比較的”単純”であったこと、イギリスでは日本の全国一斉復興事業化と違って都市によってバラツキがあったこと、ドイツの場合はガレキの処理だけでも、数年の年月を要していたこと等について述べた。日本では、戦災復興計画に対するGHQの無理解があったとはいえ、広島では「広島平和祈念都市建設法」が制定されたのは興味深かった。西山は名古屋の戦災復興計画の経緯を詳しく述べ、高山英華や井上孝等復興計画に関与した人々の名を挙げた。越澤は、関東大震災による帝都復興計画を成し遂げた都市計画プランナーの中には、満州の主要都市で新しい都市計画を推進したり、戦後日本の戦災復興計画にも寄与した人々がいたことや、広幅員道路をつくらうとする努力があったことについて述べた。長谷川は、日本とイギリスを対比させ、イギリスでは民間コンサルタントが復興計画に大きく携わったこと、日本では小林一三が復興院総裁として脱官僚主導に努めていた点を指摘し、さらに両国とも戦後の経済危機が深刻で理想通りの復興にはなり得なかったことにも言及した。

今回のワークショップは有意義なものであったが、今後は広く日本国民にも知ってもらうために、英・和語両方による発表が数多く進められることを期待したい。（堀江興新潟工科大学教授の原稿をもとに編集部で取りまとめた）

平成10年度土木史研究委員会報告

平成10年8月31日（月）、大熊孝新潟大学教授を委員長に迎え、継続委員9名、新任委員17名で平成10年度第1回土木史研究委員会が開催された（委員構成は下記参照）。各小委員会からは活動報告等がなされ、主な審議事項は以下の通りであった。

- ① 土木史研究編集小委員会より、「土木史研究」の編集について、論文体裁の変更が提案され承認された。また、発表会の運営に関して、論文掲載料の変更（詳細はP7参照）、健全な運営のために参加費を徴収する、発表会の際の見学会は原則として取りやめることが承認された。

- ② 土木史研究委員会運営内規について、主に委員会の目的、事業、委員の選出等の項目の改正がなされた。
- ③ 土木史フォーラム小委員会より、最近増加している埋蔵文化財の調査で発掘された土木構造物に関し、その評価を土木の専門的な視点でアドバイスをするシステム策定の提案があった。これに対して幹事会で検討して行くこととなった。

平成10年度土木史研究委員会の構成

委員長	大熊 孝	新潟大学	幹事	伊東 孝祐	(財)国土開発技術研究センター
副委員長	藤田 龍之	日本大学	幹事	亀井 伸雄	文化庁 文化財保護部
副委員長	渡辺 貴介	東京工業大学	幹事	貴堂 巖	佐藤鉄工(株)
幹事長	馬場 俊介	岡山大学	幹事	佐々木 葉	日本福祉大学
委員	青木 栄一	駿河台大学	幹事	鈴木 圭	鹿島建設(株)
委員	市川 紀一	(株)クローバーテクノ	幹事	高安 礼士	千葉県立現代産業科学館
委員	合田 良実	横浜国立大学	幹事	為国 孝敏	足利工業大学
委員	是永 定美	日本大学	幹事	寺川 陽	建設省土木研究所
委員	佐藤 馨一	北海道大学大学院	幹事	樋口 輝久	岡山大学
委員	高橋 和雄	長崎大学	幹事	平井 宜典	運輸省港湾技術研究所
委員	西 淳二	名古屋大学大学院	幹事	吉村 伸一	(有)吉村伸一流域計画室
委員	西田 一彦	関西大学	顧問	五十嵐 日出夫	北海学園大学
委員	藤森 照信	東京大学生産技術研究所	顧問	榛澤 芳雄	日本大学
幹事	秋山 哲男	東京都立大学大学院			
幹事	石川 大輔	日本河川開発調査会	事務局	丸畑 明子	(社)土木学会

土木博物館（仮称）基本計画策定委員会報告

神戸市では20世紀までの科学技術をテーマとして複数の博物館からなる「神戸文明博物館群構想」の実現に取り組んでおり、その先導的施設として、くらし・社会・文明の根幹を支える「土木」をテーマとする博物館を設置することが提言されている。

土木学会では平成8、9年度の2ヵ年にわたり、神戸市より「土木工学の20世紀の歩みを網羅する土木博物館（仮称）」の基本構想策定の委託を受け、土木史研究委員会が土木博物館（仮称）基本計画策定委員会（委員長 黒田勝彦神戸大学教授）を設置して検討を行ってきた。

今回の検討では、土木博物館をどのように特徴づけて展開すべきかを中心に議論を行い、土木というテーマを生かした上で21世紀に向けての新たな博物館像の提唱を行った。

骨子としては、『土木に関する資料収集保存・調査研究拠点：「アーカイブス」』と『土木と人々・地域との交流拠点：「コミュニケーション」』を展開としての2本柱とし、土木の専門的・学術的な発展への寄与と、一般の人々が土木と身近にふれあうことが出来る場作りを進めていくよう提言し結論とした。

学 会 の 動 き

「地域資産としての近代土木遺産」シンポジウムの報告

土木史研究委員会主催による、「地域資産としての近代土木遺産」シンポジウムが、平成10年10月13日、日本大学会館（東京）にて開催された。本シンポジウムでは、近代土木遺産調査小委員会を中心に進められてきた全国調査結果を公表することと合わせて、8月に刊行された「建物の見方・しらべ方—近代土木遺産の保存と活用（ぎょうせい発行）」の内容紹介、及び地域資産とした事例紹介が行われた。

まず、全国調査の中心的役割を果たされた、土木史研究委員会前委員長の高澤芳雄氏（日本大学教授）からシンポジウムのねらいが述べられ、続いて、「近代土木遺産の現状認識」として、

「調査・評価」（馬場俊介氏）、

「保存・活用」（伊東孝氏）

の基調講演が行われた。午後からは、「近代土木遺産の保護・活用事例」として、

「とやまの土木史と重要文化財

『富岩運河中島閘門』」（白井芳樹氏）、

「山梨登録文化財群」（加藤正彦氏）、

「川の文明開花—関東水閘門群」

（是永定美氏）、

「京都・琵琶湖疏水インクライン」

（北田栄造氏）、

「碓氷峠鉄道施設群」（萩原豊彦氏）、

「横浜の近代化遺産を生かした町づくり」

（中野創氏）

の6件の事例が紹介され、最後に、土木史研究委員会委員長の大熊孝氏（新潟大学教授）からシンポジウム総括が述べられ、盛会のうちに終了した。また、従来になく幅広い各方面から218名の参加者を得、より実務的観点からの活発な質疑が相次いだ。

シンポジウムを終えて、近代土木遺産の全国調査の実施による効果、すなわち土木史研究に対する認識と期待が各地に広まってきていることが実感させられると同時に、社会環境の変化に伴い、土木史研究の更なる充実・発展に対する社会的ニーズの熱気を強く感じた次第である。

（足利工業大学 為国孝敏）

「第19回土木史研究発表会」の開催と自由投稿論文の募集

土木史研究委員会（委員長：大熊 孝・新潟大学教授）では、来年度の第19回土木史研究発表会の開催にあたり、下記要領にて講演用論文を募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。なお、非会員の方々の発表も歓迎いたしますので、土木史研究に関心をもたれる方々の積極的な参加を期待しています。

- 1.主催：土木学会（担当：土木史研究委員会）
- 2.期日：1999年6月10日（木）～11日（金）
- 3.会場：関西大学百周年記念館
（大阪府吹田市山手町3-3-35）

4.募集内容：

- 1）論文テーマ：自由
時代、対象、範囲等、すべて自由
- 2）論文頁数：12頁以内
1頁2550字、9ポイント・25字×51行×2段組
- 3）使用言語：日本語もしくは英語

5.応募方法：

- 1）講演申込方法：

A4判用紙に「第19回土木史研究発表会講演申込」と明記し、①題目（副題も可）、②発表者名・連名者名・所属、③会員種別、④連絡先・電話番号、⑤和文要旨（200字程度）、⑥過去の発表経緯、⑦セッション分類（別記参照）を記述して、FAXまたは郵送にて申込み下さい。講演申込受付後、執筆要項等を送ります。

2）講演申込締切期日：

1999年1月26日（火）必着

3）論文原稿締切期日：

1999年3月31日（水）消印有効

4）論文掲載料：

論文原稿提出時にお支払い下さい。

6頁まで：21000円、8頁まで：28000円、

10頁まで：35000円、12頁まで：48000円

5）セッション分類：

プログラム編成上のセッション分類のため、下記に示す講演希望セッションを2段階分類で記入して下さい。なお、該当する分類がない場合は、キーワードを適宜ご記入下さい。

(I)分類：

人物史、技術史、社会・経済史（制度史を含む）、土木史一般（考古、研究方法論等を含む）

(II)分類：

教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通（道路、鉄道等）、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物（橋梁、トンネル、ダム等）、防災、エネルギー、農業（灌漑等）、その他

6.送付先および問合せ先：

土木学会土木史研究編集小委員会

（担当職員：丸畑明子）

（〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地、

Tel.03-3355-3559 / Fax.03-5379-0125、

E-Mail : maruhata@civil.or.jp)

『建物の見方・しらべ方
(近代土木遺産の保存と活用)』

編著 文化庁歴史的建造物調査研究会
主な著者 馬場俊介(ばば しゅんすけ)
後藤 治(ごとう おさむ)
定価 4,200円+税

『建物の見方・しらべ方
(近代産業遺産)』

編著 日本産業遺産研究会
文化庁歴史的建造物調査研究会
主な著者 清水慶一(しみず けいいち)
後藤 治(ごとう おさむ)
定価 3,200円+税

発行所 株式会社 ギョウセイ

「土木遺産編」と「近代産業遺産編」の姉妹本。本年7月に発行。明治以降の土木遺産、産業遺産を保存する業務、調査に携わる中央官庁、地方自治体、コンサルタントの実務者を対象に作成された。また、近代の土木史、建築史の大学院教育でのゼミの教科書としても役立つ。

具体的な建物、施設が文化財になりうるかどうかを調査する場合や文化財として保存する手立てを考える上で、何を、どのように調べるかという基本的な技術評価の手法、ポイント、意匠、系譜、保存活用の経緯などの必要な項目を示し、具体的な事例を挙げながらわかりやすくまとめている。

一般にはなじみの薄い、橋梁、トンネルの構造様式の違い、アーチなど構造部位の詳細な専門用語も紹介されている。

『日本百名橋』

著者 松村 博(まつむら ひろし)

定価 3,800円+税

発行所 鹿島出版会

「飛鳥川の布橋」から「明石海峡大橋」まで日本の名橋100+20橋、合わせて120橋を取り上げて、それぞれの橋にまつわる来歴から技術までが詳述されている。頁順にもこだわらずに読み進めると、古い昔からの人々の橋々に対する、橋々の人々に対する思いが、ひしと伝わってくる。

編集後記：読者の皆様のご協力により、少しずつ土木史フォーラムの存在が認識され始めてきたようです。土木関係の方々のみでなく、他分野からも土木史フォーラムの送付希望者が増えてきました。今後ともよろしくお願いいたします。

問い合わせ先：

(社)土木学会研究事業課 丸畑 明子
〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地
(Tel. 03-3355-3559 Fax. 03-5379-0125)

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No.10
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 中村 良夫
事務局 日本大学理工学部 小山茂
〒274-8501 船橋市習志野台7-24-1
TEL 0474-69-5219/FAX 0474-69-2581
E-mail : koyama@trpt.cst.nihon-u.ac.jp
URL: <http://www.trpt.cst.nihon-u.ac.jp/PLAN1/NEWSLETTER/newsletter.html>

CONTENTS

- NEWS

Remain of harbour facilities of Yayoi-era (BC.3c - AD.3c) in Kurashiki city. (SHIMOZAWA Kimiaki)

- FORUM

Repair work of the masonry walls at Iwaida-guchi of the Imperial Palace (NIITANI Yoji)

- LOCAL NEWS

The trail of the survey by INOH Tadataka in Goto island (GOTO Keinosuke)

Vories and deformed bricks caused by high temperature (JIKU Fumihiko & ARAKI Katsumi)

- OVERSEAS NEWS

Study activities of civil engineering history in a consultant company in USA (BERGER Frederic)

- OTHER INSTITUTIONS

Exhibition report "At the end of century; One hundred years of architecture". (KUBOTA Toshio)

Workshop report "International comparison of the city planning for the urban reconstructions after the world war II. " (HORIE Kou)

- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)

Meeting report

Committee member list

Report from the symposium "Modern civil engineering heritages as local asset"

The 19th Conference of CHSCE

- BOOK GUIDE